

ダリアを愛した岩佐吉純さんを偲んで

山 口 ま り

20年ほど前、当時のそごうデパートの店花がダリアであったことから、そごう柏店でダリア展を開催する計画が持ち上がりました。ディスプレイ用のダリアは切花用品種ですぐ手配できたのですが、ダリアの特徴であるバラエティ豊富な品種群の手配はどうしようかと思悩んでいた折、「岩佐さんに相談したら」とアドバイスを受けました。

当時は第一線で活躍なさっていて多忙を極めていた頃と想像されますが、ダリア協会の再興、資金作りをはじめ、花の手配、ディスプレイや展示の指示など、先頭を切って協力・指導していただきました。

それから、サカタのタネの岩佐さんではなく、ダリアの岩佐さんとして親しませていただき、また、ダリアについては何でもご存知で、よき指導者として尊敬させていただけていました。

そごうのダリア展は5年ほどで中止になり、その後ダリア協会としての活動も自然消滅状態になってしまいました。

岩佐さんは、「会社を辞めたら、またダリア会を興したい。花持ちの良いダリアを改良し、世界標準に合わせた分類・新種登録等をしなければだめだ」と、常々おっしゃっていました。ようやく主だった役職を勇退され、2004年に日本ダリア会を再興し、ダリアに尽力を傾け始めた矢先の訃報。岩佐さんに引っ張っていただいていたダリア会のメンバーへの衝撃の深さは、計り知れません。

「ダリアについては、日本では、岩佐さんに聞け」は、周知の事実でした。でも改めて、岩佐さんとダリアの関係をご本人の口から伺ったことが無かったことに気がつきました。本稿を書くに当たり、奥様や同級生、会社関係の方々には伺ったのですが、「ダリアについて話したことは、特に無かった」との答え。サカタのタネでの現役中は、日本の花産業の黎明から成熟期のけん引役であったことから、ダリアに関わりあっている時間は無かったのでしょうか。

しかし、幸いなことに、NHK趣味の園芸2006年7月号でダリアが取り上げられ、2006年3月29日、岩佐氏に「ダリアの魅力」について、編集者がインタビューしている録音が残っていました。ダリアへの思いを熱く語られ、現在のダリアの問題点やこれからの展望が40分ほど収められていました。

ダリアとの付き合い

岩佐さんを学生時代からご存知の方々によると、知り合ったときには、すでにダリアが好きであったといえます。多くのダリア好きがそうであったように、すべてが焼けってしまった終戦直後の荒廃した時代に、豪華絢爛なダリアの花に魅かれたのでしょうか。

園芸学部で昭和24年に2年生で編入し、岩佐さんと同級生になった和田大さんは、笠原貞男さん、岩佐さんと、園芸の3羽ガラスと言われたそうです。その3人で、ダリアの名花「銀盤」「白鳥」を作出した松尾晋平さんの農園にたびたび伺い、ダリアの栽培について習ったとのこと。特に岩佐さんは、毎土曜日に松尾農園に伺って、ダリアの手入れの手伝いをしていました。松尾さんからダリアの球根を購入して、当時住んでいた市川市中山で畑を100坪借りて、ダリアの栽培をして喜んでいたということです。

また、当時の指導教官の保坂先生の下、園芸学部の農場ではダリアが栽培されており、学生にダリア栽培の実習をさせていました。岩佐さんが大学で助手をしていた頃、学生であった横井政人名誉教授は、岩佐さんからダリア栽培の指導を受けたそうです。



坂田種苗（現 サカタのタネ）に入社した頃、「ダリアは良いよ。ダリアで博士号を取りたい」と話されていたことを、和田さんは思い出されるといいます。

しかし、岩佐さんは、ダリアには欠点がたくさんあると心得ていたので、ダリアを商売として扱うことはあきらめていました。ダリアは趣味と割り切っていたようですが、折りにふれダリアの資料は収集なさっていました。園芸古書のコレクションの中には、ダリアについての文献や本がたくさんあります。また、海外へ出張があると、横井名誉教授に「どこそで、ダリアを見てきた」と、話していたそうです。

第一線を退かれたとき、ホテルオークラで開かれたパーティ会場の装飾は、1,000本のダリアの切花を使われました。アレンジ担当は、三羽ガラスの1人、フラワーデザイナーとして活躍されていた、笠原貞勇さんでした。

世界各国の花に関連した場所を訪れていましたが、ダリアについては、まだ見ていないところがたくさんあり、野生状態のメキシコのダリア、イギリスのナショナルコレクションなど、横井名誉教授と一緒に行動と話していたということです。

ダリアのために

ダリアの魅力は、花の形・大きさ・色幅、草丈、草姿のバラエティの豊富さですが、花持ちが悪い、日当たりが悪いと花が咲かない、暑さに弱い、ウイルスに弱いということで、昭和の後半は人気は凋落しました。

岩佐さんは、「ダリアを普及させるためには作りにくさを改良しなければならない。そのためには、目的を持ってダリアの改良に取り組み、日本での欠点を解決しなければだめだ、育種家が元気がない」と。

インタビューの中に、育種家への苦言として、「今のダリアの育種は、育種とは言わない。育種とは、もっと花型を増やすとか、花持ちを良くするとか、豪華な花にするとか目的が無いといけない。庭でも切花でも大事な花持ちということに力を入れていない。花の育種では、ポリジーンを使った育種が大事。たとえば、黄色のコスモスの‘イエローガーデン’や、橋本さんのキバナコスモスの真っ赤な‘サンセット’などのように」と、語られていました。

ダリアの育種家、特に育種を目指す若い方を奮起させるために、「ダリアの育種について」のダリア会の講習会が、岩佐さんを講師に2006年秋に計画されていましたが、実現できなかったのは残念でなりません。

ダリア会の再結成は、「誰かが一生懸命やることにより、さらにその花の魅力が一層増してくる。そうしないと、どうにも伸びない。ダリアが盛んな国は、気候の問題（冷涼で温暖）もあるが、ナショナル・ダーリア・ソサエティがしっかりしている。そのために、日本ダリア会を立ち上げた。誰かが一生懸命ダリア協会をやって、それが進んでいけばいくらか違ってくる。せっかくダリアのブームが来ているのだから、もう少し頑張れば復興するだろう」と、意気込まれ、一生懸命やる誰かを買って出てくれたのです。

後を託して

岩佐さんが外国のダリアの情報や学術的なことを、秋田国際ダリア園の鷲澤幸治さんと川西ダリア園の内谷新悟さんが栽培などの実際の部分を担当する形で、日本ダリア会が再興しました。ダリア会の役員をはじめ、会員には全国のそうそうたるダリア愛好者・業者が揃い、岩佐さんの人脈の広さとダリアへの情熱がうかがい知れました。

そして早速、研修会・海外のダリア情報の収集・海外への日本のダリアの紹介・普及宣伝・切花用品種以外のダリア切花の流通など、精力的に活動に取り組まれたのです。将来は、岩佐氏が学術的なこと、鷲澤氏が技術的な部分を担当して、ダリアの本を出したいとの希望もありました。

また、若い世代にダリア会の運営をバトンタッチしながら、ダリアについて知っていることは隠さず伝えていき、将来は、海外のダリアを日本のダリアが乗り越えてやろうという勢いだったとのこと。

体調を崩されてから、岩佐さんは、鷲澤さんに後任の会長を委ね、会の存続、会員の研修会、今求められているダリア（花持ちの良いもの、カクタス咲き種、ウイルスに強い）の作出の3つを託しました。

現在、ダリアを見直してくれる方が多くなったということは、それだけ魅力のある花だからなのです。日本各地の街角にダリアが普通に見られるように、岩佐さんの



遺志を継ぎ、新しいダリアの作出や楽しみ方、日本独自のダリアを求め、普及させるための手助けを少しでもすることで、喜んでいただくことができるでしょう。